

先人廟合記者(清武郷先人祭 顕彰者) 功績

生誕順

No.	氏名	地域	功績
1	イトウケ 伊東家		源頼朝の側近で「曾我兄弟の仇討ち」で有名な工藤祐経を祖とし、その子祐時から伊東を名乗る。室町時代に伊豆から日向国に下向、日向一円に勢力を拡大した。南九州の覇権を争って島津氏と対峙するも、元亀3年に大敗して一時日向を追われる。豊臣秀吉の島津征伐の戦功により飢肥藩域を受領して日向に復帰、江戸時代を迎え、廃藩置県までの25代約500年間、清武地域を領した氏族。
2	ミヤタアキノカミヨシタケ 宮田安芸守儀武	清武	永正16年(1519)～永禄5年(1562) 天文年間、当事島津氏が占領する飢肥城を奪取するため、伊東義祐は兵を進め、一進一退の攻防が繰り返された。宮田安芸守は武将として活躍し、飢肥を確保した永禄5年の合戦で戦死した。
3	イナツカモンノスケシゲマサ 稲津掃部助重政	清武	天正2年(1574)～慶長7年(1602) 19歳で初代飢肥藩主祐兵の小姓となり、25歳で家老職、さらに清武城主となった武将。関ヶ原の合戦時、日向にあつて豊臣方高橋氏の宮崎城を攻め取って戦功をあげたが、このとき高橋氏が徳川方に寝返っていたため、その責任を一身に受けることになり、立て籠もった清武城で自害した。
4	マツイ ゴロベエヨシナガ 松井 五郎兵衛儀長	清武	天正12年(1584)～寛文11年(1671) 干ばつに苦しむ田吉、恒久、北方、南方の人々のために、灌漑水の確保を模索、大淀川と清武川の満潮逆流に注目して、清武川からの導水確信。水路開削を飢肥藩主に陳情し、難所「須田木の岡」の開削にも成功して、延長約4kmの「松井用水」を完成させた。
5	イノウエ シンカイ 井上 真改	木花	寛永7年(1630)～天和2年(1682) 熊野村西教寺生まれの刀匠藤原和泉守国貞の次男。父の代作を経て2代目国貞を襲名、後に真改と改名した。大阪政宗とも称される名工で、朝廷より菊紋の使用を許された数少ない刀工のひとり。他家の高禄での招抱えを辞し、100石で伊東家に仕えた。
6	ヤスイ ソウシュウ 安井 滄洲	清武	明和4年(1767)～天保6年(1835) 上中野に生まれる。諱は朝完、字を平右衛門、滄洲はその号。幼少から学問に励み、若くして江戸の古屋昔陽、京都の皆川淇園など古学派の学者に師事した。自宅や地頭所で教育を開始、清武郷校「明教堂」建設の機運を高め、郷校設置後は次男息軒とともに清武の子弟教育に専念した。後に再興された藩校「振徳堂」の初代総裁となり藩の学問の新興に寄与した。
7	オチアイ ソウセキ 落合 雙石	飢肥	天明5年(1785)～明治元年(1868) 飢肥に生まれ、名は子載、通称鉄五郎又は敬介と称する。長崎、京都、江戸の昌平坂学問所で学び、飢肥藩に帰郷後、振徳堂教授及び藩主伊東祐相の侍読となる。晩年は大坂に住み文業を楽しむ。著書に「鴻爪集」「論語統」などがある。
8	スギタ シンザエモン 杉田 新左衛門	木花	寛政元年(1789)～安政2年(1855) 熊野村島山に生まれる。寛文2年に起こった外所大地震により海没した水田を復活させるため、文政年間に高さ約3m、延長2kmに及ぶ堤防を築いた。これにより約60ヘクタールの水田は美田となり、安定した収穫をもたらした。
9	クロキ シチザエモン 黒木 七左衛門	清武	寛政5年(1793)～明治6年(1873) 旧幕府領、船引村の庄屋。若くして庄屋となり、河川改修や、正手の水路、隧道建設、また葬祭等の悪習の改正等領民の福祉の向上に貢献した。

先人廟合記者(清武郷先人祭 顕彰者) 功績

生誕順

No.	氏名	地域	功績
10	ヤスイ ソッケン 安井 息軒	清武	寛政11年(1799)～明治9年(1876) 幼少の頃から学問に傾倒し、元服までに家の蔵書を読み上げ、近隣に書を求めた。21歳で大坂の篠崎小竹、25歳から江戸の昌平坂学問所で苦学した。帰郷して郷校明教堂、藩校振徳堂の助教として父滄洲を助け、40歳で江戸に移住して「三計塾」を開く。文久2年に幕府儒官を拝命し、昌平坂学問所教授に、元治元年には飢肥藩を凌ぐ6万3千石の奥州塙の代官に任命される。生涯を学問と人材育成に捧げ、新時代の幕開けに活躍した約2,000名の人材を輩出した。明治9年9月23日、77歳で江戸に没し、千駄木養源寺に葬られた。
11	アマノ トヨソウ 阿万 豊藏	清武	文化7年(1810)～明治9年(1876) 中野に生まれ、安井滄洲・息軒に師事した後、江戸の昌平坂学問所で学んだ。帰国後明教堂・振徳堂の教授となり、明治維新後は小参事司教局総裁になった。
12	ヤスイ サヨ 安井 佐代	清武	文化9年(1812)～文久2年(1862) 安井息軒の妻。清武岡の川添家に生まれる。「岡の小町」と称される程容姿端麗で、16歳で息軒の妻となる。献身的に息軒を支えたその姿は、森鷗外の小説「安井夫人」で紹介されている。夫息軒の幕府儒官拝命を目前にした文久2年、51歳で江戸で病死した。
13	ヒラベ キョウナン 平部 嶺南	清武	文化12年(1815)～明治23年(1890) 字を温卿、通称良介という。清武中野の和田家に生まれ、18歳のとき飢肥の平部家の養子となる。明教堂で安井息軒に師事し、以後息軒を生涯の師と仰ぐ。昌平坂学問所で学んだ後、振徳堂の教授、山方奉行、番頭、家老と栄進し、明治維新の際には大参事となった。著書に大著「日向地誌」がある。
14	ミナミムラ テイゾウ 南村 鼎三	赤江	文政9年(1826)～明治31年(1898) 赤江城ヶ崎に生まれる。明治初年より養蚕事業を奨励し、座繰製糸工場を設けてその製品を横浜に運び、海外輸出の道を開いた。学業にも熱心で赤江地方の教育の基礎を築いた。
15	ヨジ ツネソウ 湯地 平生三	清武	天保元年(1830)～明治32年(1899) 清武加納に生まれ、飢肥藩の勘定方物産係を拝命、明治維新後は地租改正顧問、勸業委員、戸長、宮崎県第七大区副区長、清武商社長を歴任し、幕藩体制から明治という民主主義社会への大転換期に社会の安定をめざして活躍した。
16	ヤノ ゲンジロウ 矢野 源次郎	清武	天保3年(1832)～明治42年(1909) 栃木県宇都宮市大工町に生まれる。養蚕業に精通し、加江田に蚕室を設け、近隣に養蚕業を広めると共に城ヶ崎に製糸場を建てて指導に当たり、養蚕新興の基礎を確立した。
17	モリナガ ナスオ 守永 南州男	赤江	天保8年(1837)～明治32年(1899) 赤江に生まれ、幼少にして学問を好み、学識高く、後に私塾を設けて有能な青少年を教育し、数多くの名士を輩出した。また赤江村初代村長に就任し、以来35年間その職にあつて赤江進展の基礎を確立した。
18	ツダ サダエ 津田 貞衛	清武	弘化元年(1844)～明治45年(1912) 清武の中野に生まれる。明治の初め折生迫の庄屋となり、明治9年折生迫村の戸長に就任すると教育の重要性を説き、村塾を設けて文教の道を広めた。塾生は2百余人に及び、学生改革で塾は紫波洲崎小学校と繋がった。

先人廟合記者(清武郷先人祭 顕彰者) 功績

生誕順

No.	氏名	地域	功績
19	コジョウ ゴンペイ 小城 権平	清武	嘉永元年(1848)～昭和5年(1930) 新町に生まれる。新町区長を務め、教育の重要性和将来の教育予算を洞察し、学校基本林の必要性を説いた。率先して自己所有の山林約3町歩を村に寄付し、村民はこれに感動し隣接地を購入して膨大な町有林が誕生した。
20	カワゴエ ススム 川越 進	清武	嘉永元年(1848)～大正4年(1915) 木原に生まれ、明治5年に戸長助役に就任、西南の役に従軍後、鹿児島県雇いとなり、明治13年県議会議員に当選した。長年にわたり本県の分県運動に努力し、明治16年に県議会議長に就任すると宮崎県の分県に成功した。分県後の県議会議長となり、後に第1回衆議院議員に当選、以来連続5回当選して本県の発展に寄与した。
21	ナガトモ ヤスオ 長友 安雄	青島	嘉永5年(1852)～明治44年(1911) 青島村折生迫に生まれる。明治27年に青島神社の社掌となり、鶴戸神宮の禰宜を兼務した。また青島の亜熱帯植物の保存と育成に尽力し、観光青島の基礎を確立した。
22	ヨシナガ シンゾウ 吉永 新藏	青島	安政2年(1855)～明治26年(1893) 青島村折生迫に生まれる。明治4年に折生迫で初めて鱧延縄を試み、好結果を得ると、これを奨励し、漁具と漁法の改善、中国輸出用のフカヒレの製造を進めるなど漁業の進展に貢献した。
23	マツダ シュウゾウ 松田 拾藏	青島	安政3年(1856)～昭和11年(1936) 折生迫に生まれる。初代青島村長として村政の基礎を確認した。又郡会議員となり、郡政にも貢献さらに青島神社の改築、ピロ-樹製土産の開発など産業の振興に寄与した。
24	クロキ シゲイ 黒木 重家	清武	安政4年(1857)～昭和11年(1936) 木原に生まれ、明治28年に清武助役、ついで村長に就任し、基本財産の構築、農桑植栽の勧誘、就学奨励などにつとめた。また、納税規約を定め、滞納を一掃した。明治36年に藍綬褒章を授与した。
25	ヤスイ コタロウ 安井 小太郎	清武	安政5年(1858)～昭和13年(1938) 安井息軒の長女須磨子と志士北有馬太郎の長男として江戸に生まれる。北有馬太郎が捕縛され獄死すると、母、妹と共に帰郷し、清武の大久保に暮らす。後に上京し、勉学に励み、祖業を継承して学習院、一高、北京大学堂等で50年余り教鞭をとり教育に貢献した。朴堂と号し、斯文会などに参与して現代漢学会の泰斗と称された。
26	ナガトモ アントン 長友 安敦	清武	安政5年(1858)～昭和7年(1932) 中野に生まれる。父の田野地頭就任によって田野に移住する。明治7年上京し、安井息軒の三計塾に学び、帰郷後清武、田野、大淀の小学校で教鞭をとる。明治22年の町村制施行の際、初代田野村長に就任、以後3代、4代の村長に就任し、十二年間村政に尽力した。
27	スギタ ヒサタロウ 杉田 久太郎	青島	文久4年(1864)～明治24年(1891) 青島村折生迫に生まれ、漁労を生業とする。明治22年漁業組合頭取に選出されると遠洋漁業に将来性を見出し、漁場を開拓した。朝鮮半島近海に出漁した際、病気となり、29歳の若さで釜山に客死した。明治中期の朝鮮半島近海への出漁の先駆者である。

先人廟合記者(清武郷先人祭 顕彰者) 功績

生誕順

No.	氏名	地域	功績
28	アラタケ タミソウ 荒武 民三	清武	元治元年(1864)～昭和17年(1942) 中野の和田家次男として生まれ、荒武家の養子となる。明治15年、清武小学校の教員となり、その後、森林監主として農商務省に勤めた。後に清武村長、村農会長となり、土木、産業、教育、基本財産の造成等に尽力した。
29	ワタナベ コウサク 渡辺 幸作	木花	慶応元年(1865)～昭和4年(1929) 鏡洲出身。明治19年以降農事試作委員、農事試験委員、青年会長、学事奨励委員、学校保護会長などを歴任し、社会教育及び農林業開発に大きく貢献した。教育功労者として宮崎郡教育会から、また、山林植栽の功績顕著として宮崎県山林会から表彰された。
30	コウツマ ミツジ 高妻 満次	青島	慶応元年(1865)～昭和20年(1945) 折生迫に生まれる。教師となり、校舎移転や野島分教場設置に尽力した。内海郵便局長を経て、大正3年に青島村長となり、当時の貧困財政における納税の必要性を説き村政に尽力し、文教・産業の奨励指導に努力した。
31	イングロ テイイチ 石黒 貞一	木花	明治元年(1868)～昭和11年(1936) 熊野に生まれる。若くして青年会長、消防組頭として活躍。明治40年に木花村長に就任、学校の新改築、道路改良などに尽力するとともに、植林事業を奨励して基本林を育成し、また、漁業組合長、養蚕組合長として産業創設に貢献した。
32	ナガトモ ヤスマサ 長友 安昌	田野	明治2年(1869)～昭和20年(1945) 下屋敷に生まれる。明治40年、田野村長に当選、同44年に県議員に当選し連続6期、その他の公職に就き、植林事業を奨励、国有林の部分林設定、学校基本林の造成に貢献した。
33	ユジ コウヘイ 湯地 幸平	田野	明治3年(1870)～昭和6年(1931) 築地原に生まれ、日本大学を卒業後、高等文官試験に合格。台湾警視総長、福井県知事、警保局長を歴任、後に貴族院議員となり帝国教育会議長など多くの重責を歴任した。
34	イワキリ ハクサ 岩切 秀	清武	明治3年(1870)～昭和19年(1944) 加納に生まれる。大正13年に村長となり、3期にわたって村政に携わり、その間、山林250町歩を村基本林として確保し、村財政の基礎をつくる等村政に貢献した。
35	ハラダ ヨシノリ 原田 義教	赤江	明治7年(1874)～昭和35年(1960) 城ヶ崎宝泉寺に生まれ、住職として努める傍ら、宮崎県釈放者保護会を設立して、釈放者の更生保護に努めるなど地方教化事業に貢献した。また、赤江振興会を設立し、赤江地区の振興を図った。
36	ミヤガワ ミツノリ 宮川 満徳	清武	明治9年(1876)～昭和26年(1951) 岡に生まれる。明治34年清武村役場に奉職、後に農事試験場で水稻・大豆の改良に貢献した。村会議員、県議員、県農会長等を務め、町有林の設定、清武隧道問題などで尽力し、産業の発展に貢献した。
37	ユジ サダナリ 湯地 貞成	清武	明治9年(1876)～昭和36年(1961) 岡に生まれ、清武信用組合長として農家経済の立て直しをはかり、負債整理組合を設立し、長期低利の資金の導入に努力。治山治水にも意を用い、産業の発展に大きく貢献した。

先人廟合記者(清武郷先人祭 顕彰者) 功績

生誕順

No.	氏名	地域	功績
38	マツダ コウヘイ 松田 幸平	木花	明治13年(1880)～昭和7年(1932) 熊野に生まれる。木花村長、郡農会長、郡会議員などを歴任し、農業の改良普及や地方自治の進展に尽くした。正蓮寺平野の耕地整理に尽力し、約200haの耕地整理を完成させた。
39	スズキ セイジ 鈴木 清司	青島	明治17年(1884)～昭和55年(1980) 青島に生まれる。県師範学校卒業後22年間教職にあつて、子弟の教育に専念。その後、村長として貧困な村政の回復に心血を注いだ。郷土誌『青島』の刊行にも資料提供等大いに貢献した。
40	イングロ タカシチ 石黒 高七	木花	明治19年(1886)～昭和19年(1944) 熊野に生まれ、宮崎郡農業技手として精励。木花村助役続いて木花村長となり、自作農の創設、小学校の移転改築等に尽力し、農業会長、産業組合長となり村政に功績を残す。
41	コバエ ナオザブロウ 小八重 直三郎	青島	明治19年(1886)～昭和36年(1961) 青島に生まれ、判事として各裁判所に勤務。宮崎地方裁判所の調停委員、司法委員を務める傍ら、社会教育委員、児童福祉審議会委員をして郷土の社会教育に大いに貢献。
42	オチアイ ジュウキチ 落合 重吉	赤江	明治20年(1887)～昭和21年(1946) 田吉に生まれる。農商務省九州支場養蜂主任技手となり、清武村農会技手、赤江村助役、全国養蜂協会会長等を歴任し、その間、日向南瓜、胡瓜、トマト、甘藍等農業の改善と振興を図った。
43	ヒダカ タダシ 日高 正	清武	明治21年(1888)～昭和55年(1980) 木原に生まれ、長崎医学専門学校を卒業し、開業。その傍ら、村会議員、PTA会長等を務め、卓越した見識と情熱で保健、教育、住民福祉等の向上に貢献した。清武町名誉町民。
44	オグラ キュウハチ 小倉 久八	木花	明治22年(1889)～昭和42年(1967) 木花に生まれ、長期に渡り村会議員、議長として木花村政に貢献した。その間、地区の経済、産業教育の振興に寄与すること甚大。晩年、木花、加江田、鏡洲に保育園を設立し幼児保育に専念。
45	ウエノ エイソウ 上野 栄藏	田野	明治22年(1889)～昭和49年(1974) 田野学ノ木に生まれ、田野村(町)議会議長として、財政的窮乏の行政を立ち直らせ、農地改革にも努めた。自己所有地3,000坪を町に寄贈。県議として県民福祉の向上に尽力した。
46	ツダ シゲル 津田 茂	田野	明治24年(1891)～昭和40年(1965) 木花に生まれ、田野村長、県会議員等を歴任し、青年教育の振興や県政の発展に貢献した。また、学識と経験から県司法保護委員会参事となり民生の安定に尽力した。
47	カワゴエ イシオ 川越 石男	木花	明治34年(1901)～平成10年(1998) 熊野に生まれ、宮崎県職として30余年在職。県議会議員として20年間奉職し、議長として県政発展に尽力。農業、観光振興、双石山、加江田溪谷の自然保護運動に取り組んだ。

先人廟合祀者(清武郷先人祭 顕彰者) 功績

生誕順

No.	氏 名	地域	功 績
48	カワサキ サダオ 川崎 貞男	木花	明治34年(1901)～平成15年(2003) 木原に生まれ、海軍に入隊し、終戦後は戦没者墓地の建設、支所の移転、学園都市建設の建設協力会長、ふるさと国体の地元協力会長などの職を務め、木花郷土誌の編さん発行に尽力した。
49	ミワ タダヨシ 三輪 忠珍	青島	明治41年(1908)～昭和31年(1956) 住吉に生まれる。京都大学大学院を卒業後、現宮崎大学農学部の教官となり、日向夏みかんの受粉受精現象と落果問題で農学博士の学位を取得。宮崎県文化賞を受賞した。
50	イワウラ ハヤミ 岩浦 逸美	清武	大正4年(1915)～昭和36年(1961) 木花に生まれる。日大卒。清武村助役、農業会会長、村長を経て、昭和25年初代町長となる。県議会議員を3期務め、PTA会長としても力を尽くし、公私にわたって地域に貢献した。
51	ナガトモ ヤスモリ 長友 安盛	清武	大正4年(1915)～平成20年(2008) 船引に生まれ、農協の組合長や理事を歴任。農業経済の安定充実、生産基盤確立、農畜産物の付加価値向上、農協系機関の運営など、農業経営の安定に尽力した。清武町名誉町民。
52	ヤマダ ミヨシ 山田 美義	清武	大正5年(1916)～昭和59年(1984) 加納に生まれる。町議を5期務め、その間女子短大、三和電気の誘致、八重川の改修等に多大な功績を成し、その後、県議として4期連続当選するも4期目の5月、急逝した。
53	サトウ カイチ 佐藤 嘉一	木花	大正6年(1917)～昭和55年(1980) 熊野に生まれる。県農業関係機関の役職に就き、清武、赤江、木花の組合合併を推進し、南宮崎農業協同組合を発足させた。また、市郡4農業共済組合の合併も実現させた。
54	ツネヨシ マサオ 恒吉 政男	赤江	大正7年(1918)～昭和52年(1977) 恒久に生まれ、市議会議員在任中、小戸橋、大淀大橋の完成を実現させた。市消防力の基礎を築き協会会長賞を受賞。市体育協会の要職も務め、スポーツの発展に貢献した。